

関東大震災 被災・救援・復興の証言

― 渋沢栄一、周囲の群像、財界・政界の中枢 ―

永治日出雄

第一章 九月一日 日本橋兜町の激震と渋沢栄一の被災

補説第一 金融界中枢の火災・防衛―第一銀行および日本銀行

第二章 九月二日 飛鳥山での避難と危機管理の提起

補説第二 大震災と渋沢系列企業―帝国ホテル、渋沢倉庫、田園都市

第三章 九月三日 地元被災者への救援活動

補説第三 政局への震撼と救済・復興内閣の成立

第四章 九月四日 救済政策の始動―渋沢栄一と後藤新平の連携

第五章 九月五日 協調会への救援要請

第六章 九月六日 救援事務局の施策と後藤新平の采配

第七章 九月七日 遷都論への対処と埼玉救護団の始動

第八章 九月八日 貴衆両院からの協力と在日外国人への支援

第九章 九月九日 組織的救済への協議と天誅論の吐露

第十章 九月十日 有力実業家の救済機構準備

第十一章 九月十一日 大震災善後会の成立と運営

第十二章 九月十二日 遷都論の阻止と詔勅の渙発

第十三章 九月十三日 大震災善後会の罹災地視察

第一章 震災第一日 日本橋兜町の激震と渋沢栄一の被災

一 兜町事務所における衝撃

日本における資本主義の父とも讃えられる渋沢栄一は、一九三三年（大正一二年）九月一日午前十一時五十八分、日本橋兜町で大地震に襲われた。一九〇七年に六九の企業・団体から、また一九一六年第一銀行など金融機関からも身を退いた彼は、なお社会事業の推進に専念し、兜町事務所において執務中であった。照明や瓦は落下したが、堅固な西洋館は激震に耐え、秘書に支えられて戸外へ脱出する。①翌々月に刊行された東京銀行集会所の機関誌『銀行通信録』に渋沢の震災証言が掲載された。長文の記録は激震の様相に始まり、脱出・避難を経て、救援と復興への参与へと続く。

兜町事務所での被災（渋沢栄一「大震災の追想と所感」その一）

① 白石喜太郎著『渋沢栄一翁』刀江書院、一九三三年。九〇六頁。（白石喜太郎著『渋沢栄一翁 九二年の生涯』国書刊行会二〇二二年。冬の巻、七五頁。）

白石喜太郎による評伝については一九三三刀江書院版へ基本的に依拠するが、国書刊行会の現代文テキスト版を適宜参照する。

世の中に長く生存して居ると種々なる変化に出会ふのは人類の免れぬ事であります。八十四歳の高齡に居ります為に、有りと有らゆると云ふ言葉は穩当でないかも知れぬけれども、或は日本に於て或はもう少し大きく言へば外国に於て、種々なる変化に出会つて、身それに接して苦んだり、或は又聞いて驚いたり、重ね重ねの所謂有為転変の世の中を送りましたが、今度の地震も即ち其一つとして数へられるやうに思ふ。

既往を回顧すると私共の青年の時分には封建制度が何時迄続くか分らぬ位に思つて居たから、之が王政復古と云ふことすら時々世の中に議論はあつたけれども、果して実現さる、ものかと云ふ位に皆疑つて居つた。併しそれが私の丁度青年から壮年に移ると云ふ比ひに実行された。其頃欧羅巴の有様などを多少見聞して、例へば仏蘭西博覧会に行つて同国の繁盛なる有様を見て、何時までも継続するものと實とに凡眼の情なき皮相の観をしたのである。私の帰つて来たのは千八百六十八年であつたが、其後三年許りを過ぎると帝政は直ぐ變じて拿破崙は捕虜になると云ふやうな有様。其仏蘭西の隆々たる有様に抵抗した独逸が爾來相當の年月は続いたけれども、是以て千九百十五年からの戦争に依つて拿破崙以上のみじめな有様になつた、是等は多くは政治上人為的变化であるけれども、仮令人為的でも人間の想像には逆も及ばぬやうな事であつた。或は地方に於ても色々の洪水があつたとか火災があつたとか随分天変地異も其間に少からぬのであるが、地震に付ても十五の時に安政の地震に出会した、併し其時は田舎に居りまして震源地でなかつたから、至て軽微のものであつた、況んや少年で其後東京へ出ましたけれども、十分な記憶もない位だから、身触れては居つたけれども、併し十分の記憶を以て地震に対する意見を言ふことは出来ませぬ。其後例へば桑港の地震などに付ては容易ならぬことと思つて、国家的に多少は救済方法を講ずると云うて、寄附金などを募集して送つて

上げたことはありません。

ところが今度の地震は実に意外な事で、私自身にはそんなに大変と思はなかつた。兜町で丁度書類を調べて居って、俄に揺れ出したに付て同じ事務所に出て居る若い人に助けられて室外に出ましたけれども、唯々見て居る前に壁が大変振はれたり、中には煉瓦が落ちたり、屋根が大分壊れたように見えたから、困ったものだと思いますけれども、焼けると云う考は些かとも持たなかつた。

併し唯々残念なのは明治二十一年頃建築したもので、死んだ辰野金吾と云う人の御手見せの建物で、小さい建物ではあるけれども私の身体から言っても辰野の技術から言っても、一種の歴史的の建物で、既に此春であつたか、小さい食事の時に今の大蔵大臣の井上君が度々私は此処へ来て御馳走などになったり、寄合に加わったりするが、未だ此建物を能く見なかつた、併し今日は染み染み見た、良い家だ、贅沢の普請だと申しますから、贅沢でも無いではないが、今の建築から見ると、甚だ見窄らしいと申したら、そうでない、五階の煉瓦造とは大変違ふ。斯う云う家は壊さないやうにして貰ひたいものだ、好い見本になるなど言つて、頻りに褒めたりして居つた。客間の天井に変わった絵の切込んだのがあつたり、或いは側に川があるものですか

ら、『ヴェニス』に柱を建てたり、総てそんなものが一層珍重された。①

日本橋の橋畔、兜町は明治維新ののち金融の中心として開発され、一八七一年に第一国立銀行が、一八七八年には東京株式取引所がそこに設立された。東京駅や帝国ホテルを造営した著名な建築家辰野金吾が、渋沢栄一のためそこに西洋館を建てたのである。その邸宅は日本橋川の河畔にあつて、瀟洒な二階テラスからは日本橋や魚河岸も展望でき、その眺めはあたかもヴェネチアのリアルト橋をも連想させる。栄一の証言のなかで、この住まいを称讃した「井上君」とは、当時日本銀行総裁の地位にあり、まもなく震災内閣の大蔵大臣に就任し、一九三二年に暗殺される井上準之助にほかならぬ。門弟が編纂した『青淵先生六十年史』から渋谷邸についての記述を参照する。

① 渋沢栄一「大震災の追想と所感一二」『銀行通信録』第七六卷第四五五号（大正十二年十一月）。

（『渋沢栄一全集』平凡社、一九三〇年。第三卷、四九一―四九三頁。および『渋沢栄一伝記資料』

第五十一巻、二四―二五頁。）

本稿の主要な史料のひとつ、この回顧録は『銀行通信録』に掲載されたのち、『渋沢栄一全集』と『渋沢栄一伝記資料』にも収録される。なお、当初の題目「大震災の追想と所感一二」が『渋沢栄一全集』においては「大震災の追想と所感」と改題された。

〔参照〕白石喜太郎著『渋沢栄一翁』、八〇七頁。（『渋沢栄一翁 九二年の生涯』冬の巻、七六頁。）

兜町邸は明治十九年十二月工を起し建築する所にして工学博士辰野金吾の設計により模範を伊太利ベニスの家屋に取たるものなりと云ふ。本邸は市中最も熱鬧の中央に位し川に臨み西洋風に建築せるものにして舞踊室をもしなえたり。蓋し明治十九年頃我交際社会を文明風に誘導改良せざるべからずとの説朝野有志者の間に起りたるべき當時実業社会の人の多くは公けの交際と云ふ意味を解せず之れは御役人の務にして自分等の関知すへき所にあらずとの観念ありあいを以て先生は率先例を聞くの考にありしと云えり或人嘗て謂へることあり商業上国家的と言ふ先生の議論は聴きたるか王子邸と云ひ兜町邸と云ひ家を造るについても亦国家的の観念ありと以てテ先生平生の志の存する所知るべきなり ①

つとに明治十六年ヨーロッパ留学の直後、辰野金吾は日本橋坂本町に位置する東京銀行集会所の設計を渋沢から相談され、依頼者の胸中に豪壮な都市計画が宿ることに感嘆した。「日本橋から東京湾に向う兜町、南茅場町、坂本町の三町を、運河を活かしたベニスのように変えることである。この地区に、彼は自らが設立した会社、金融機関や会議所、集会所を置き、ついにはイタリア風デザインの自邸まで」建てた。建築に関する渋沢との会話が辰野には楽しみであったと言う。②

① 『青淵先生六十年史』龍門社、一九〇〇年。第二卷、九一三頁。

② 東秀紀著『東京駅の建築家辰野金吾伝』講談社、二〇〇二年。二二二―二二四頁。

兜町事務所の被災を伝えるいまひとつの証言は、栄一の四男渋沢秀雄の聞き書きである。のちに彼はむしろ文筆家・洋画家として世に知られるが、父親を創立者とする田園都市株式会社取締役を務め、おりしも軽井沢へ出張中であつた。

大正十二年九月一日の昼に大地震が突発した。兜町の古い事務所で秘書の増田明六と用談中だつた栄一の服は、天井や壁から落ち散る漆喰のため真っ白になり、部屋全体が波のように揺れに揺れた。

太りじしの八十四翁に敏活な動作はできない。増田が栄一を導いてやつと戸口まで辿りついたときに第二の激震がおこり、マントルピースの上に張られた大鏡は顛落し、天井中央のシャンデリヤも落下して、一大音響と共にガラスの破片を炸裂させた。二、三步おくれれば、そのどちらかに打たれた筈である。そこへ事務員の井田善之助も駆けつけてきた。二人は身をもって老翁をかばいながら玄関前へ逃れ出た。

そうした栄一の眼前で、ヴェネチャン・ゴチックの洋館は見る見る壁をふるい落とし、柱を傾けさせてムザンな姿に変わっていった。しかも後刻付近におこつた火の手で一ト呑みにされてしまった。そこには編纂中の徳川慶喜伝資料が保管してあつた。①

一八九二年（明治二五年）渋沢家の邸宅であつたこの建物で秀雄は出生し、九歳までここで育つた。幼い日兜

① 渋沢秀雄著『父渋沢栄一』実業之日本社、一九五九年。下巻、一八一―一八二頁。

町の父母と家庭について彼は仄かに回想する。神田の錦輝館で活動写真に接したのもこの時期であった。

なんでも私が数え年の四つ、父が五十六歳時分に、兜町の家の玄関で父の出勤を見送った記憶がいちばん古いように思う。元氣と迫力にあふれる父は来客か秘書と用談しながら玄関へ出てきたのだろう。そしておそらく緊張した表情を緩めながら、私を両手にかかえて目よりも高くさしあげると「そうりゃ、そりゃ重くなったぞよ」などといって、下におろして頭をなでてくれたのを覚えている。そしてそうされることが若干のこわさと、気はずかしさと、微量のうれしさだったことも覚えている。

母に対するいちばん震い記憶は、家で幻灯会があったときの様な気がする。椅子の一つに腰かけた母が、私を保母のミチヤから抱きとってひざにのせ、幻灯がうつりだしてあたりが暗くなると、私の頭にアゴやぐらびるを軽く当てて愛撫してくれたことを思い出す。〔中略〕

兜町時代の私に、もっとも鮮明な印象を残しているのは活動写真、いまの映画である。たしか日本で最初に入場料を取って活動写真を公開したのは、明治三十年で、場所は東京神田の錦輝館だと聞いたことがある。活動写真はみな西洋物ばかりだった。〔中略〕

兜町の家は川に面していたから、だれでもない来客用の食堂へゆくと、窓を横切る船を自由に眺められた。私はひとりでその部屋にはいり、西洋の汽船に似たガルムブネがくるのを見届けるとテーブルの上にあがり、(活動写真)「沈没」のときやるジンタのメロディーを口ずさみながら船長の悲痛な表情をマネし、ガルム

ブネが窓を通るのに合わせて、床のジュウタンへ飛びおちる。そしてそれを何度も繰り返し返した。①

一八七八年王子飛鳥山に自邸が建設されて、以後兜町の建物は事務所転用される。「洪沢事務所は、」とかっての秘書白石喜太郎は説明する。「あるときは実業界における種々の事象の発源地であり、あるときは公共事業の誕生所であった。翁の関係するところが広汎だけに、洪沢事務所の関係するところもまた極めて雑多であった。この広き範囲にわたる多種多様の関係を処理するとともに、資金の運用管理をもつかさどった。翁が実業界の人として活躍した間は、みずからその運用管理に任じた。」② 地震発生の数年前、飛鳥山から兜町へ通勤する彼の日常も、雑誌『実業之日本』でつぎのように紹介される。

男爵洪沢栄一は当年とって七十六歳の高齡を以て、意氣壯者を凌ぎ、日々奮闘、平均十五時間に涉るとは驚くではないか。此寒空に男爵は毎日六時には早くも床を離れて入浴し、其日の奮闘準備に掛るのが常だ。午前七時からモウ客が飛鳥山本邸に続々詰め掛け、中には我こそ天晴先登第一の名譽を荷はんものと、開門前より押し寄せ、門の開くや否や飛び込む大熱心家も居る。午前十時頃まで、日々少なくとも七八人の客が引切りなしに尋ねて来るので、どうかすると男爵は朝飯を喰いはぐれることが度々あるそうだ。

① 洪沢秀雄「私の履歴書」日本経済新聞社編「私の履歴書 文化人3」一九八三年。一六一―二〇頁。

② 白石喜太郎著『洪沢栄一翁』、六六一―六六二頁。(『洪沢栄一翁 九二年の生涯』秋の巻、二一六頁。)

午前十時頃になると話を切り上げて、三十二号の銘を打ったる自動車に乗って警備勇ましく本邸を出て、途中三、四軒の約束先を順次訪問し、それから目下男爵の唯一の実業的事業たる第一に立ち寄り、そこで重役と食卓を同うし、行務を打ち合わせながら昼食を取ると言う寸法になっている。

かくて兜町の事務所に、福徳円満のニコニコ顔を現すが、たいがい午後一時半頃である。そこにはすでに数多の客が詰めかけて、男爵の来所を今や遅しと鶴首している。後から後からと引つ切りなしに来る客が、日々どうしても二十名以上あるようだ。親切な男爵は多くは客を引見し、そして噛んで含めるような反復丁寧な談話振り、玄関に客を送り出でてなおねんごろでつきない。そのなかに諸方から電話が引つ切りなしにかかってくる。四時頃になると、モウ約束の時間がきて、またもや外出。毎晩止むを得ざる会が少なくとも二ヶ所はある。それを済まし、ようやくその日の活動を終わって飛鳥山の本邸へ帰るのが、たいがい午後十時頃である。それから朝見残したその日の新聞紙や、諸方から寄贈してきた諸雑誌を繙読して、ようやく午後十二時ころ床に就くのが例だ。

さて兜町の本陣における男爵の机の据えてある所というのは、二十畳敷くらい西洋間で、応接兼用になっている。ズツと室に入ると、向かって左には一双の屏風が列べられ、正面には暖かそうに燃やされたストーブが据えられ、その脇に男爵の机と応接用のテーブルとが左右に置かれ、そのテーブルを囲って五、六脚の皮張り椅子が列べられている。〔中略〕

男爵の机上に諸方から日々降ってくる手紙は本邸約十本、兜町事務所均し三十本、合計約四十本位なそう。そのなかで一番多いのは、男爵の今も関係しておられる慈善および教育に關することである。金を貸してくれとか、寄付して欲しいとか、職業を世話してもらいたいといったような無心状が、日に三、四本ずつ

くる。そしてそれが一面識もない知らぬ人からのだから驚く…… ①

さらにその数年後、地震発生の一九二三年についても洪沢の日常に關し貴重な史料が保存される。『洪沢栄一伝記資料』の別巻として公開される彼自身の『日記』がそれである。ヨーロッパ視察中の慶応四年に始まり、逝去の前年昭和五年まで続けられる綿密な手稿には、大震災前後の十カ月弱を欠くとは言え、元旦から三月六日までの休みなない記録が含まれる。この時期にも日々飛鳥山から兜町へ通勤する彼は、事務所において人造肥料会社や都市田園株式会社など、洪沢系列の企業運営に尽力していた。また、巢鴨養育院や日曜学校協会などの社会事業をも支援したことが確認できる。

洪沢栄一『日記』 大正十二年（一九二三年）

一月十一日 木 曇寒

午前七時半起床、入浴シテ、朝食ス、オエテ太郎田中氏ノ来訪ニ接シ養育院ノ事ヲ談ス、午前九時過兜町事務所ニ抵リ勇之助佐々木、成彬池田二氏ノ来訪ニ接シテ人造肥料三会社併合ノ方法ニ付協議ス、得男渡辺参席ス、オエテ田園都市会社ノ重役会ニ出席シテ同会社ノ将来ニ付意見ヲ陳フ、金太郎服部、照男明石等モ

① 白石喜太郎著『洪沢栄一翁』、六四七―六四九頁。（『洪沢栄一翁 九二年の生涯』秋の巻、一九七一―二〇〇頁。）

来会ス、オエテ一同ト午食シ、午後二時島村氏ノ葬儀ニ出席ス、四時再ヒ事務所ニ抵リテ肥料会社併合ノ事ニ付三会社ノ当局者ト会見ス、又恒平諸井氏、澄三郎植村氏等来話ス、其他数多ノ来客ニ接ス、六時過帰宅、夜食後、三会社併合ニ関スル手続書ノ原稿ヲ調成ス、蓋シ明日清書シテ各会社ニ交付スヘキモノナリ、夜一時過ニ至リ脱稿、一時過就寢

一月十二日 曇寒

午前七時起床、入浴シテ、朝食ス、後白石来リテ今日人造肥料会社ノ併合ニ付三会社ニ交付スヘキ裁定書ノ清書ニ従事ス、蓮沼、瓜生二氏来リ修養園ノ経営及朝鮮支部ノ事ヲ協議ス、裁定書ノ淨写オハリテ十二時頃急遽事務所ニ出勤シテ、大日本人造肥料会社以下三会社ノ代表者ニ接見シテ併合ニ付テノ調査要件ヲ陳述シテ裁定書ヲ交付ス、栄八郎田中、駿吉二神、松村某氏等各裁定ノ趣旨ヲ服膺シテ成功ニ努力スヘキ事ヲ明言ス、午食後、二三ノ来人ニ接シ、又書類ヲ点檢ス、二時神田三登代町(美土代)ノ青年会館ニ抵リ、米人ジョン・ワナメーカー氏ノ追悼会ニ出席シテ追悼演説ヲ為ス、四時春樹街ノ家ニ抵リテ夜食シ、且書類ヲ調査ス、夜十時帰宅、後、雜誌類ヲ一覽ス、十二時過就寢
(欄外) 憲忠安達氏、豊作尾高氏等ヘノ書状ヲ作ル

一月十三日 土 晴寒

午前七時起床、入浴、朝食例ノ如クシテ後、二三ノ来人ニ接シ、九時兼鴨養育院ノ分院ニ抵リ児童ヲ集メテ新年ノ訓示ヲ為シ、又大塚本院ニ抵リ幹事以下ノ事務員等ニ訓示ヲ為ス、オエテ田中氏ト要務ヲ協議ス、十時半迄 南町重遠穂積ノ家ニ於テ重義ノ葬儀ニ列席ス、十二時三田綱町ノ家ヲ訪ヘ敦子、時子等ト会話シ、時子ノ英国 行ノ事ヲ協議ス、午食後福原氏ノ家ヲ訪ヘ、二時兜町事務所ニ抵ル、陸郎高木氏来リ中日実業会社ノ事ヲ談ス、井深、今村、コールマン氏等来リ、日曜学校会堂建設ニ付テノ寄附金勸募ノ事ヲ談ス、其他種々ノ来訪客アリ、六時頃ヨリ事務所員ニ留守中ノ要務ヲ口授ス、明日 湯河原ニ避寒スルニヨルナリ、六時半真砂町ノ家ニ抵リ、八郎、丑之助氏等ニ訓言ス、夜十時帰宅、明日湯河原 行ニ付旅装ノ事ヲ弁ス、十一時半 就寢

一月十四日 日 朝晴午後曇 寒

午前六時 起床、入浴、朝食例ノ如クシテ後、理髪ス、七時半総一郎浅野氏来ル、昨日吉川氏外数名ヨリ正雄ト共ニ申出タル富士製鋼会社業務拡張ノ件ヲ浅野氏ト談話ス、午前九時家ヲ発シ兼子ト共ニ湯河原浴場ニ向テ出發ス、家人留守中ノ事ヲ指示ス、九時半東京停車場ニヨル家人又ハ事務所員等多ク送別ス、増田、白石等ニ用務ヲ口授ス、豊治和田氏ヘ国士館ノ事、竜平白岩氏ヘ世清顔氏ヘノ伝言ヲ口授ス、増田ヘハ米國發電ノ事ヲ命ス、九時半東京駅發、徳次郎横山氏横浜迄同行シ小倉製鋼所ノ事ヲ談ス、汽車中ニ元治郎牧野氏同乗シテ種々ノ談話ヲ交換ス、車中雜沓シテ知人多シ、一時頃小田原ニヨリ新路湯河原行ノ路ヲ取ル、処々ニ隧道アリ、山路屈曲多キモ敢テ危険ノ惧ナシ、真鶴駅ニテ下車シ停車場ニテ自動車ニ搭乘ス、湯河原浴

二 第一銀行本店への避難

兜町事務所は激震にも持ち堪えたものの、相当に破壊されてやはり危険であり、まもなく渋沢栄一は至近の距離、第一銀行の建物へ避難した。この金融機関は彼自身によって創立された日本最初の銀行であって、海運橋の袂に建てられた和洋折衷の高楼が世の関心を惹き、歌川芳虎や小林清親の浮世絵にも描かれた。地震発生のとき避難したのは、一九〇二年辰野金吾の設計により改築された堅固な西洋建築である。『銀行通信録』に寄せられた渋沢の証言をふたたび参照したい。

第一銀行への避難（渋沢栄一「大震災の追想と所感のその二」）

夫れで其日は今言ふひどい震動の為に、外へ出て嘆息して時々壁が振れるのを見て居りましたけれども、別に仕様がな、其処へ第一銀行の方から、此方は揺れるけれども銀行の方は決して潰れるやうな心配はない、此方へお出でなすつたら宜かろうと云うて呉れたから、其処へ行つて午食に「パン」など食べて、少し休息して居つた。其中に一応王子の方へ帰りたいと思つたが途中街路は地震及火災の避難者で充満した場所もあるので、通り筋を一応確かめた上先ず丸の内から須田町に出て、明神坂から本郷三丁目を切通しへ出て

① 渋沢栄一『日記』大正十二年（一九二三年）。『渋沢栄一伝記資料別巻第二 日記（大正四年―昭和五年）』

上野へ這入り根津から動坂を登つて、此処（王子の子爵邸）へ帰つて来ました。かれこれ四時頃でもありませんでしたが、其時まで如此大火災にならうとは少しも思わなかつた。

尤も銀行に居たとき、火災が二、三箇所始まったやうだが、震災後の火災は怖いものだと言ふことに、私は氣付はしたけれども、傍らに居る人が此処が焼けるやうなことはどうしたてあるう筈はないと言ふから、私の方の事務所は逆も用になるまい、大分破れたから修繕がどうだろうか、何れ地震が止んだら後で始末して見なければならぬと思うが、事に依ると彼処で事務が執れぬと思ふたので銀行から一室借受けて必要書類だけ此方へ移させることにして私は帰る。途中が心配だから送つて上げませうと云われたので、其氣に為つて増田に送られて家へ帰つてきた。①

一八七三年日本最初の銀行、第一国立銀行が日本橋兜町において創立された。「明治六年六月十一日 栄一創立總會ニ出席シ、銀行營業方法、三井小野兩組ヨリ役員撰出ノ件、總監役ヲ設クル件ノ三案ヲ提議シ、且ツ自ラ草案セル申合せ規則及同増補ヲ一読シテ衆ニ詢リ株主ノ賛同ヲ受ク。席上取締役ニ推薦セラレシモ尚官職にアル

① 渋沢栄一「大震災の追想と所感」二。『銀行通信録』第七六卷第四五五号『渋沢栄一伝記資料』第五一卷、

二五―二六頁。

〔参照〕白石喜太郎著『渋沢栄一翁』、八〇八―八〇九頁。（『渋沢栄一翁 九二年の生涯』冬の巻、七七―七八頁。）

ヲ以テ辞シ、翌十二日総監役就任ニ関スル契約ヲ締結ス。」① 維新以前の金融機関としては、兩替商、蔵元、札差等しもなく、機械制大工業や大規模な商業に対応できぬ規模であった。第一国立銀行、一八九六年の改名による第一銀行について、創立の意義と経緯が白石喜太郎の評伝『渋沢栄一翁』で詳しく述べられる。

第一銀行は翁の実業界へのスタートとして、また第一銀行は翁の実業界における光輝に充てる活躍の総本部として、忘るべからざるものである。翁が洋々たる前途を有する官場生活と綺麗さっぱり絶縁し、ほとんどまったく新しき経験とも言ふべき商工業界の人として働くことになり、先輩と言わず友人と言わず、知る限りの人をして啞然たらしめたこの飛躍をなすに至ったことはすでに記した。

当時の翁の期するところは、論語を信条として商工業を営み、もって商工業者の地位を向上せしめ、官尊民卑の弊風打破を実現せんとするのであった。すなわち条理による商工業経営の実現が目標であった。而してこの理想実現のため選んだのは第一国立銀行の設立であった。この点だけでも第一国立銀行は、翁を考へるとき第一に挙げねばならぬものである。しかも半世紀にわたって常に翁の活動の中心であったことを考へるとき、その感が一層深いのである。

第一国立銀行は翁が苦心立案せる国立銀行条例によって生まれたものである。銀行条例は理想に近いきわめて新しい実業機関に関する成規であった。ゆえにこれを理解するもの少く、たとえ理解する者があっても、

① 渋沢家所蔵文書。『渋沢栄一伝記資料』第四卷、五頁。

これを実現せる力あるものは稀であった。当時国立銀行を設立し、もしくは設立に参加し得べしと認められたもののは、三井、小野、島田の三組であった。子爵はこれに着眼し、協同経営をしよんぎやう懲悪した。しかし、島田組はいくばもなくその力を失ったため、三井、小野の提携勸説に力を用いたのである。①

地震発生の時点における第一銀行については大著『第一銀行史』に銀行員吉岡義治の証言が見出される。吉岡はコンクリート建四階で最初の震動に襲われ、すぐさま辰野金吾設計の旧館営業部へ戻った。七年前に渋沢が引退し、このとき頭取の地位には佐々木勇之助があり、三女愛子の婿、明石照男は本店支配人を務めていた。

震災当日宿直して本店が灰燼に帰し去った様子をつぶさに体験した吉岡義二の手記（昭和二年十一月『龍門雜誌』をみよう）。

「自分は丁度その時コンクリート建の四階の大食堂で将に食事しようとしていた。始め嵐の近づくやうな音を耳にしたと思ふ瞬間、床下を何ものかが大鉄槌でなぐり付けるような激動を感じた。咄嗟に地震とは思ひつかなかつた。激しい上下動だ！と思ふ間もなく天井が崩れて来そうに見えた。鉄鎖で釣った照明燈ぶらんこのように天井を往復して今にも離れさうだ。遙かな地平線が窓框のなかを上下している。今にこの五層楼が横倒しに河に墜ちて居並ぶ人々と共死するのかと観念した。」

① 白石喜太郎著『渋沢栄一翁』、二四五―一四六頁。（『渋沢栄一翁 九二年の生涯』頁。）

やがて吉岡は職場に戻ろうとして本館へ帰っていったのである。〔中略〕

「薄暗い本館の室へ勇を鼓して入って見ると、平常百人居る営業所に人影は稀れて、唯大切な場所に数人の人々が不安そうに残って居た。自分の方の席に主任の酒井さんが下を向いたまま緊張した顔で手紙を書いて居る。ひどい砂埃の中に座って頭上の大天井が気味悪く揺ぐのも顧みずその日の事務を執り続けている。」そのとき第二震が来た。「寺院の天井のやうに高い営業室全体が凄まじい家鳴りをたてて響きわたり、三丈余の大円柱がは波うって今にも倒れそうであった。

「この時、室の中央の支配人席に立って居た日頃温厚な支配人が毅然として（この地震では何処へ逃げて同じ事だ。この職席を離れずに居よう。ここで最後となるもそれまでの覚悟だ。）と同僚の人々を励まして動かなかつた。

支配人は明石照男であった。吉岡は「思えばあの古い石造の大建築が崩れなかったのは幸いであつた」と言っている。すでに明治三十五年から二十数年経っていて古色は覆うべくもなかったが、石造ゆえに火災に罹るとは思わなかつた。

この夜吉岡は宿直の補充となつて早川政次と共に本店に夜を明かすことになつた。①

一八七三年海運橋の袂に創立された第一国立銀行の建物は、清水喜助の設計で三井組により造営された。伝統

① 第一銀行八十年史編纂室『第一銀行史』第一銀行、一九五七年。上巻、九三八―九四〇頁。

的な土蔵造りを基本とし、和洋折衷の豪華なその建築は、文明開化の名所として歌川芳虎や小林清親の浮世絵にも描かれる。その後一八九六年条例改正に伴つて第一銀行と名称を変更し、一九〇二年約三倍の面積に改築された。① この時期に編纂された『龍門雜誌』には、こうした建造と落成の模様が詳しく記録される。

○第一銀行の新築工事

第一銀行は明治六年第一国立銀行創立の際より、廿余年間青淵先生の統理の下にありて、拮据経営以て国立銀行の模範たることを期し、営業の基礎益鞏固となり、其区域拡張せられ、明治廿九年九月廿五日国立銀行の営業満期となるべきを以て、更に資本金を四百五十万円に増加し、私立銀行として営業を継続すること、なりしを以て、此際本支店の建築にして改築を要するものは、漸次其工事に着手するの議、重役の間に起り、遂に卅年一月廿五日営業継続後、第一回株主總會に於て、本店家屋改築の爲め毎季其積立金を設くべく、而して其構造は事務所総坪数大略三百三十余坪金庫三十二坪、外に附属家屋等若干にして、其費用は大約十五万円以上式拾万円許の予定なれども、当時其製図設計中なるを以て、他日予算を確定して更に報告すべき旨を告げ、且つ同季より其積立金を為すべきことを議了し、同期利益金の中より式万円を新築費積立金となし、其後毎半季必らず同額の積立金をせり、之と同時に仁川支店名古屋支店をも改築するの議起り、本店改築の序を以て其工事に着手すること、せり、

① 『第一銀行史』上巻、二七一―二七三、九二七―九三一頁。

建築の設計は日本銀行其他の建築物の設計者として監督者として工学社会に有名なる工学博士辰野金吾氏に委托したり、同氏は工学士石井敬吉氏を補助となし、工学士新家孝正氏を工事監督となし、工学士森山松之助氏、建築師中尾光次郎、日高尚忠氏等を招致して、製図及び工事に着手せしむること、なせり、銀行に於ては主として本店支配人佐々木勇之助氏、周密にして敏慧なる注意を以て、其監督の任に当られたり、本店の位地、殆かも世界の金融市場の中心たる倫敦に於けるロンバードストリートの如く、将来に於て東洋市場の中心たるへき東京の最中心——銀行取引所其他の金融機関か軒を並へて其營業を競へる日本橋区兜町に於て——而かも銀行建築の最良条件とも云ふへき四隣街衢に接したる、即ち出入に最も便利なる地位を占むるものなり、此好位地に於て、辰野工学博士の細密にして豊富なる意匠を以て Renaissance Style 復興式に則りて其設計を為し、外觀の美を銜んよりも寧ろ建築の堅牢を旨とし、佐々木支配人の親切にして周到なる注意を以て、接客と執務の便利を主とし監督せらるゝことなれば、実に私立銀行の模範建築と云ふも可なきなり、

明治三十一年五月を以て旧營業所の後方兜町式番地に建設せる仮營業所に移転し、直に旧營業所を取毀ち、九月に至り残材を悉く取除き、同月より新築工事に着手せり、

建築は前後の二部に分れ、前部は營業場にして後部には重役室支配入室其他の事務室応接室食堂を設け、其上層を会議室となせり、其他地中室を設けたり、最も光線と換気とに注意を加へ、外壁は石造にして内壁には鉄条を縦横に交叉し、床は新式の耐火床を張り、震災火災等の危険を防ぎ、暖房機、消火機、電灯其他内部の設備微細の粧飾に至るまで、質素を旨とし実用を主として計画をなせり、

目下基礎工事に着手中にして、日々数十人の人夫を役して松材を打ち込みて地盤固めをなし、一方に於て蒸氣機を用ひてコンクリートを製造せり、河岸に仮橋を架設して建築用材の揚卸をなし、深川大工町の作事場と水上にて往来せり、

工程尚初期にあれども、明後年の末に到りて落成せるものとせば第一銀行は二十世紀の劈頭に於て巍然として海運橋畔に大觀を現すへし

①

○第一銀行新築披露会景況

第一銀行新築建物は去三月卅一日落成したるを以て四月三日午前九時より午後四時迄府下の紳士紳商等を招きて屋内を觀覽に供し新築の披露を為したるが、來觀者は蜂須賀侯爵、鍋嶋侯爵、三井男爵、三井守之助、三井養之助、大倉喜八郎、浅野総一郎、原六郎、馬越恭平、今村清之助、園田孝吉、田口卯吉氏等を始めとし無慮一千余名にして、頭取たる青淵先生を始め佐々木支配人以下入口に於て一々來觀者を迎へ当日の紀念品たる白扇及紙扶を交付し、続て行員の先導にて先づ營業場を始め各室を鄭寧に案内し詳細なる説明をなし、階上の広間には接待場を設け立食茶菓の饗応ありて、觀覽を終りたる者は順次後の入口より夫々退散したり、尚ほ当日午前八時今同行中庭に建設したる青淵先生の銅像除幕式を挙行し、先づ佐々木支配人の祝詞あり、続て同先生の答辭、及行員一同に対する懇篤なる訓戒の演説ありたりと云ふ

○新築第一銀行の構造及設備

第一銀行本店新築建物は地を日本橋区兜町一番地にトし、去明治三十一年九月十五日に之が起工を為し、頭取たる青淵先生の素志に基き其設計並に構造等は専ら堅牢なるを旨とし華美の裝飾は努めて之を避け支配人佐々木勇之助氏之が指揮を為し、工学博士辰野金吾氏の設計に基き工学士新家孝正氏工事監督の任に当り、暖房工事は工学博士坂田貞一氏、電気工事は工学博士玉木弁太郎氏担任して、爾來約三ヶ年半の星霜を経、遂に今三十五年三月三十一日を以て全くに其工事全部の落成を告げ、愈々去四月六日此に移転し、明七日より此新築家屋に於て営業を開始せり、今其構造及設備の概略を記載すれば左の如し

建築紀要

地坪 八百七十三坪八合二勺五才

建坪 四百七十二坪六合

本館 外法四百一坪四合

営業室 二百七坪八合

重役室及各室 百六十二坪五合

金庫 三十一坪一合

附屬家七十一坪二合

構造 石造にして石材は花崗石白丁場石を用ひ、壁真に鉄棒鉄条を積込み、各室の床は鉄骨耐火構造にして、入口及窓には英式のシャッターを用ひ、屋根は防火の為めアスベストスミルボードを用ひ、銅板及スレートを以て葺立て、屋上に避雷針を設け、各室に暖房器を備へ、地下室に発電機並に蓄電池を置き、電灯及金庫内換気の用に供し、三階に至る迄非常消火栓を設け、耐火防火等の設備には最も周到なる注意を用ひ、完全

を期したり

基礎 コンクリート厚さ五尺其底面地盤線より十五尺なり

①

住民数十万の運命を揺るがし、渋沢の生活と環境をも激変させた大正十二年九月一日について、秘書白石は以下のとおり手帳に誌す。「午前十一時五十八分大地震発ル、震動ノ為メ渋沢事務所大破、惨憺タリ、折柄事務所ニアリシ子爵栄一及増田以下全員無事、一同第一銀行ニ避難、子爵ハ同行旧館ニ於テ、頭取・石井・杉田・西条諸氏ト談話小憩ノ上、午後二時三十分頃明石氏ノ自動車ニテ（子爵乗用七七号車ハ事務所正門附近煉瓦・石材其他山積シタル為メ運出シ不能トナリタル為メ）根津ニ大迂廻シテ帰邸セラル、増田氏同伴、円庭ノ仮小屋ニテ就眠セラル」② こうして渋沢栄一は兜町事務所での被災から脱出し、夕宵飛鳥山の邸宅へ無事帰還した。

三 徳川慶喜史料の焼尽

渋沢が脱出した日本橋兜町一帯は、同日夕宵から延焼に襲われ、幾多の建物とともに兜町事務所も焼失した。火災の様相は翌日飛鳥山に報告され、彼自身が兜町で確認するのは数日後である。ヴェネチア風の西洋館は貴重

① 『龍門雜誌』第一六七号（明治三五年四月）、三二―三四頁。『渋沢栄一伝記資料』第四卷、六〇―五―

六〇六頁。

② 「白石喜太郎手記」『渋沢栄一伝記資料』第五〇卷、一九六―一九七頁。

な資産であったが、焼尽を彼がとくに慨嘆するのは、二階に蔵された徳川慶喜の伝記史料にほかならぬ。

徳川慶喜史料の焼尽（洪沢栄一「大震災の追想と所感」その三）

二階は小そうございましたけれども、ことよつたら小舞踏くらいやれるというような趣向の室が二つ、数寄を尽くしたとはいえぬけれども、多少立派に出来ておった。しかし、もう二十年ばかり前に、徳川慶喜公の御伝記編纂所に使つたらよろしかろうというので編纂所に提供した。ために書物の置場になって、小さい図書館の体裁になって、脇の方の事務室に五、六人、もうひとつの室に五、六人、あるときは十人、十二、三人寄つて調べるといふような有様でございました。かくして、長い間置いたからかしこへ書類を置き、ここへ材料を置くといふような塩梅で、みなそれが一種の伝記編纂所に自然と形造られたのです。慶喜公の伝記が済んだのち、洪沢の記録を調べる、それは私の希望ではなかつたけれども、私の子供たちがしきりに要望して、この場所で引き続いてやりたいということで、やはり相変わらず編纂所的にやっていたのですが、はなはだ残念なことは、類焼するようにはあるまいと思つて、持ち出すことをしなかつたために、それらの書類全部を焼いてしまつた。まことに残念で、私はもう人に会うと、しきりに自分の不注意、無神経を恥じて、いうさえ腹が立つくらいです。〔中略〕

火災の注意を些ともせずに、何ともないと思つたのが、翌朝聞けば皆焼けてしまつた。何たる遺憾であつたか、何たる不注意であつたか、それ等に比較すべくもないけれども、彼の水戸へ行くと彰考館と云ふのがあります、大日本史編纂に関する記料が山のやうに積んである。最も面白いのは義公の左伝に対する意見書

とか、或は烈公が貝原の著述に書入をしたものとか、是等は大日本史編纂の為では無いだらうけれども、多くは大日本史編纂に関する記料として集つたものを拾ひ上げて積んである。私は嘗て彼処へ行つて一時間ばかりそんな書類を拝見したことがあります。それ等に做ふ積りでもなかつたけれども、慶喜公の御伝記の記料は永年掛つて集めましたから、成べく部類を分けてちやんと保存させたい、水戸の彰考館の小さなものもたやうにし、且つ併せて私の歴史などを調べると云ふのですから子供の時分からの日記みたやうなものや、仏蘭西旅行中の書類や、或は維新後に至るまで知友などより来た書翰等、嘗て一遍調べて置いたのであつたが、其中の書翰はそれを取扱ふ者に悪い奴があつて盗まれてしまつた、併し其中の三条さんの手紙と西郷の手紙、木戸の手紙、其他三・四十通もありましたらうがそれだけが失くなり、余の書類は三本の巻物になつて居つた、それをどう云ふ訳であつたか、阿部吾市さんが何処かで買つて、皆私の宛名になつて居るから、面白いと思つて買つたと云うて、二十年も前のことです、こんなものを買ひましたからと云うて持つて来て呉れた、それは其後私が保存して居つた。それすらも今の住所の編纂所にやつて置いたのを併せて失ひました。是等は唯々折角大事な書類を、さう云ふやうな方法にして置いて、自分では安全に保存し得るものと思つて居つたのが、火災と云ふ注意を怠つた為に皆烏有に帰したと云ふのは、何と云ふ不注意であつたか、

尊皇攘夷の志士でもあつた渋沢栄一が、徳川御三卿のひとつ、一橋家の家臣として抱えられたの一八六四年(元治元年)である。やがて大政奉還と戊辰戦争を経て徳川慶喜は駿府へ蟄居し、他方幕府からヨーロッパへの留学を命じられた渋沢は、帰国後明治政府の財政確立に尽力し、さらに実業界に転じて国立第一銀行をはじめ、幾多の企業を創立した。一八二七年に栄一はふたつの大厄、産業のトラブルに発する壮士暴行とガンの症候に襲われ、苦境のなかで『徳川慶喜公伝』への編纂を着想する。

渋沢栄一「徳川慶喜公伝の編纂も謝恩の爲め」

私が旧主徳川慶喜公の御伝記を編纂するやうになつたのも、一に謝恩の爲めである。私は素より一橋家譜代の臣でも無ければ、又その禄を食んだと申しても、前後を通じて僅に五年に過ぎぬのだが、死ぬべき生命を慶喜公によつて助けられ、私の今日あるのは、一に一橋家仕官時代に発したものと思ふので、その大恩が

① 渋沢栄一「大震災の追想と所感一二」。『銀行通信録』第七六巻第四五五号『渋沢栄一伝記資料』第五一巻、

二五―二六頁。

〔参照〕白石喜太郎著『渋沢栄一翁』、八〇八―八〇九頁。(『渋沢栄一翁 九二年の生涯』冬の巻、七七―七八頁。)

どうしても忘れられず、世間に慶喜公を誤解して居る人々が多く、若しや誤つて後世に伝へらる、やうなことになりでもすれば、誠に御気の毒でもあり、遺憾でもあり、後世を誤ることも多からうと存じ、私が進んで慶喜公の御伝記を編纂することにしたのである。

徳川慶喜公伝編纂の事は、明治二六・七年頃、故桜痴居士福地源一郎氏と会して談つた時に、その端を發したもので、福地氏より此の事業を始めては何うかと話された所より思ひ起つたのであるが、同氏ならば旧幕の人でもあり、且つ達文家で、歴史上の造詣も深い故、編纂者として適任だらうと思ひ、穂積・阪谷の両氏とも協議の上、愈よ福地氏に依頼して編纂に着手する事に決したのである。(中略) その中福地氏は明治三九年一月四日六十六歳で歿してしまはれたのである。これが今より約十年前の事である。

初め慶喜公伝の編纂を福地氏に托する際にも、穂積・阪谷の両氏に協議したのであるから、福地氏の歿後、私は編纂事業を如何に進行したら宜しいものだらうかと両氏に相談したのである。幕末の事情を知らうとするには、当時の事情に詳しい人々を編纂の評議役にして置かねばならぬといふので、廿人ばかりに之を依頼して置いたのであるが何れも老人なる為め、追々と鬼籍に入り、今は残り少なくなつてるほど故、編纂事業の進行を急ぐ必要もあつた所から、穂積・阪谷両氏は、兎に角全事業を挙げて専門の歴史家に委託してしまふのが宜しからうそれに文学博士の上三参次氏に更めて相談するが最捷徑だらうとの意見を提出し、私も至極尤もの意見だと考へたので、穂積氏と三上氏とは至つて別懇の間柄でもある関係上、穂積氏より三上氏に通じたのであるが、三上氏は兎も角一度私に会はうと云ふ事になり、穂積氏と同道で同氏が私を訪ねて下されたので、私は委細同氏と協議したのである。

三上氏の意見は、折角徳川慶喜公伝を編纂して後世に遺しても、それが若し偏頗なものになつては後世の

識を受くる恐れもあるから、旧幕の人に依囑するよりも、歴史の専攻家をして編纂事業に当らしむるが宜しかるべく、然らば自分は多忙なるを以て親しくその衝に当ることは出来ぬけれども、顧問役の格で編纂事業を監理しても苦しく無いからとて、同氏は主任者として文学博士萩野由之氏を推薦せられたのである。萩野氏は現に大学教授の職に在る人で、史眼もあり文筆にも長じ、誠に好適者であると思つたので、私も三上氏の意見に同意し、萩野氏を編纂の主任者とし、一切を挙げて編纂事業を同氏に委囑し、三上氏も好意を以て公務の傍ら之を監理せらるることとなり、編纂所を私の兜町事務所の二階に置き、規律的に編纂事業を進行するに至つたのであるが、爾来今日まで既う十年にもなる。

徳川慶喜公伝編纂所は、私の兜町事務所の二階二間を占めて居るのであるが、編纂に要する図書なども寄せ宛め、珍らしい本ばかりでも既に数百冊に上つてゐる。編纂所の組織は大体に於て二部に分れ、一を記述掛とし、一を紀料係とし、記述掛の方には、萩野博士が自ら長となり、外に三人の輔佐員を率ひて之に当られて居る、紀料掛の方には、桑名の人で江間政発と申さるる方が長となり、是亦三人の輔佐員を置いて諸家所蔵の記録・古文書を調査謄写したり、又参考書類を閲読して抜萃したり、幕末の事情に精通する古老を訪問して其談話を聴取したりなどして紀料を作り、之を記述掛の方に提出致すと、記述掛の方では之を調査取捨して記述の材料を得、之によつて記述する事になつて居るのである。

編纂の大方針は、余り批判を加へず材料を組織的に編纂して、事実を有のまゝに示し、読者をして判断せしめる事にしてあるのだが、時には材料を総合して断定を加へて置いた所もある。記述せられた部分は一々私が眼を通して読み、之に対し私の意見も申述べることにして居るが、私の幕末に於ける進退などに就ても、この慶喜公伝の中には詳細に記録せらるゝことになつて居る。

慶喜公伝の編纂事業は、幕末の事情に精通する古老に次々と逝かれてしまへば、材料を得るに困難なわけにもなり、又私とても永遠まで生きて居られるものでも無いから、能きるだけ進行を急いで来たのであるが、斯る事業は進行の遅々たるのが本来の性質である所より、明治廿六・七年の頃、始めて編纂に着手して以来、既に二十年にもなるがまだ完了する迄には至つて居らぬ、然し愈よ本年早々の中に編纂だけは完了の運びとなる筈である。①

朝敵との汚名を洗われ、公爵に叙せられた興山公徳川慶喜は一八九七年（明治三十年）東京へ移り、月毎に数度拜謁する洪沢栄一は、諸社株式の取得など徳川家の資産確保をも支援した。一九〇七年六月二四日著者を洪沢栄一、顧問を徳積陳重と阪谷芳郎、校閲を三上参次および萩野由之と定め、『徳川慶喜公伝』の編纂が兜町事務所で本格的に開始される。さらに洪沢はあるいは小石川の徳川家を訪問し、あるいは飛鳥山の自邸へ招待して、伝記編纂への参与と懇請した。徳川第十五代將軍たりし慶喜がかくして兜町事務所での編集会議、昔夢会に臨席し、貴重な証言や史実の確認を行うこと十七回にも及ぶ。幕末から維新に及ぶ慶喜の回顧は、多く編纂委員の速記をとおり、また事項によつては自身の筆記によつて記録され、会合の報告「昔夢会筆記」としてすべて複写さ

洪沢栄一 日記

明治四十年四月十二日 晴 暖

起床 六時四十分 就蓐 十二時

起床後入浴、オエテ朝食ヲ為ス、八時秋田銀行辻、加賀谷、村田三氏来訪ス、午前九時人造肥料会社ニ抵リ重役会ヲ開キ要務ヲ議決ス、午後一時兜町事務所ニ抵リ、参次三上氏、穂積、篤二、政登江間等ト御伝記ノ事ヲ談ス、三時半有栖川宮殿下ノ邸ニ抵リ妃殿下ニ謁シテ、慈恵医院ノ事ニ関シ御依頼アリ、後斎藤氏ト会話ス、四時過キ西園寺総理ヲ訪問シ要務ヲ談シ、更ニ井上伯ヲ麻布邸ニ訪ヒ種々ノ談話ヲ為シ、午後六時銀行集会所ニ抵リ手形交換所聯合会ニ出席ス、食卓上一場ノ演説ヲ為ス、オエテ築地ニ抵リ、夜十二時帰宿ス

同年五月八日 晴 暖

起床 七時

起床後入浴シ、オエテ朝食ヲ喫ス、食後二三ノ来客ニ接シ、午前十時兜町事務所ニ抵リ、嘉吉内田氏、浅野、岡崎、岸本氏等ト会见ス、午後王子ニ帰宿ス、此日徳川公爵其他御一族ヲ王子ニ招宴ノ約アルニ付午後ヨリ其来会ヲ待ツ、三時頃御一同来会セラレ、夫ヨリ庭園ヲ散歩シ、牡丹ヲ賞シ新緑ヲ見、五時頃ヨリ席

① 『洪沢栄一伝記資料』第二七巻、四六〇―四七二頁。

上種々ノ余興アリ、特ニ篤二、尾高二氏ノ洋楽合奏ノ淨瑠璃ハ頗ル興味ヲ添ヘタリ、夜十一時過散会ス

同年六月二四日

是日ヨリ日本橋区兜町洪沢事務所楼上ニ編纂所ヲ置キ、著者栄一、顧問穂積陳重・阪谷芳郎、校修者三上参次・萩野由之、編纂主任萩野由之、立案者小林庄次郎及ヒ記料蒐集者江間政登等ノ所負ヲ以テ徳川慶喜ノ伝記編纂ヲ開始ス。

同年七月二十三日 晴 暑

起床 七時 就蓐 十一時三十分

起床後入浴シ、オヘテ庭園ヲ散歩シ、来人ニ接ス、午前十時事務所ニヨリ来人ニ接シ事務ヲ処理ス、正午事務所ニ於テ午食ス、高木男爵来リ慈恵会ノ事ヲ談ス 午後三時ヨリ徳川公爵来臨アリ、伝記編纂ノ事ニ関シ種々ノ談話アリ 三上、萩野ニ博士、小林学士、穂積、阪谷、篤二等モ来会シ、公爵ヨリ往事談アリテ頗ル興味ヲ添フ、夜 十一時散会、帰宿ス

同年十一月三日 曇 冷

起床 七時三十分 就蓐 十二時

起床直ニ入浴シ、オヘテ朝食ヲ食ス、食後庭園ノ散歩ヲ為ス、又日記ヲ編成ス 恒平諸井氏来リ 六郎ノ婚儀ニ付種々ノ談話ヲ為ス、午食後書類ヲ調査シ、三時小石川徳川公爵ヲ訪問ス、五時帝國ホテルニ抵リ、更ニ築地ニヨリテ一友人ヲ訪フテ夜食ス、夜九時外務大臣官舎ニ催フサレタル夜会ニ参列シ、十一時王子ニ帰宿ス

明治四一年三月一日 雨寒

午前八時起床、入浴シ、オヘテ日記ヲ編成ス、敬止西田氏来リテ女学館ノ事ヲ談ス、九時過朝食ヲ食ス、食後、徳川公爵御伝記ノ初稿ヲ読ミ意見ノ書入ヲ為ス、オヘテ紀料ヲ通覽ス 午食後麻布二井上侯爵ヲ訪ヒ、原油輸入税ノ事ニ関シ総一郎浅野氏ヨリ依頼ノ件々ヲ陳述ス、午後六時帰宿、夜食ス、夜紀料其他ノ書類ヲ読ム ①

洪沢栄一「昔夢会筆記例言」

昔夢会筆記は、徳川慶喜公か予等の問に對へて、其御閱歴を語り給へる御談話の筆記なり。

予が公の御伝記を編纂するに當りて、公を自邸に屈請して、編纂員と共に親しく旧事を問ひ奉れることは、明治四十年七月二十三日を始とす。此会を昔夢会と名けしは、公の選び給へるなり。公の此会に臨ませ給へるは凡十七回、又稿本成る毎に、每章呈覽して批正を仰ぎ、編纂員公の邸に就きて親しく教を承りしことも八回なりき。其度毎に公の親話を筆記し置きたるもの、積みて冊を成せり。今や公覺じ給ひて、再び音容を拝することを得ず、片言隻語も益貴重の史料たり。此に於て其筆記を校正印刷して謄写に代ふ。公は固より其御閱歴を語るをだにも喜ばせ給はず、況や広く世に公にすることをや。故に部数も僅に二十五を限りて、

① 洪沢栄一『日記』明治四〇年―四一年（一九〇七年―一九〇八年）。『洪沢栄一伝記資料別巻第一 日記（慶応四年―大正三年）』

御伝記の起稿に關係せる者のみに頒つ。

第一より第四までは編纂員の筆記なれば、総て文章体に記せり。其後速記を用ゐることを許されたれば、公の御談話の趣、今尚親しく教を承るの想あり。然るに速記者ありては話しくしと仰せられて第十四よりは又筆記となれり。前後異同あるは是が為めなり。①

一九一三年（大正二年）十一月十五日昔夢会への出席予定を取り止めた興山公德川慶喜は、その七日後小石川小日向の邸宅で心臓疾患のため逝去した。歿後の公開を前提とする伝記はその四年後に完成して、一九一八年龍門社より刊行され、書肆富山房をとおし発売される。本編四冊、附録三冊、索引一冊、合して全八冊、総紙数四千二百余頁の大冊である。完成に際しては慶喜の墓前に徳川家達など遺族側十数名、さらには洪沢はじめ編纂側十数名が参列し、伝記献呈奉告式が行われた。② この式典でなされた栄一の式辞は同書の意義と編纂の真意を簡潔に語っている。

① 洪沢栄一編『昔夢会筆記』一九一五年。上巻、一―二頁。『洪沢栄一伝記資料』第二七巻、四六〇頁。

② 『竜門雜誌』第三五五号、大正六年十二月、八一―八四頁。『洪沢栄一伝記資料』第四七巻、六八七―六八九頁。

白石喜太郎著『洪沢栄一翁』六三三―六三五頁。（白石喜太郎著『洪沢栄一 九二年の生涯』秋の巻、一七八―一八一頁。）

「興山公御墓前に於て」

大正六年十一月二十二日

洪沢栄一 敬白

私は此忘るゝ能はざる忌辰を卜しまして御墓前に於て興山公の神霊に告げ奉らんと存じます。明治二十七年以降二十有余年私の心血を濺ぎて公の御伝記編纂に努力致しましたのは深い衷情の存する処でございます。公の御生前に於て此計画は詳細に聞き召され御許可も蒙りましたが、遂に其成本は御墓前に奉呈するに至つたのは、如何にも残り惜しく思ふのでございます。〔中略〕

御伝記を完成して今日あらしむるに至るまでの私の苦辛も尋常一様ではありませぬが、其経営に就きましては今日列席しました主任者萩野文学博士其他の編纂委員は勿論のこと顧問たる三上文学博士及親戚の穂積・阪谷両男爵共に心を尽して援助せられ、私をして今日此奉告を為さしめて呉れたのでございます。故に私は是も併て神霊に告げ奉らねばならぬのでございます。今往事を回想して、に追懐の辞を陳上致しますれば、私が二十四歳の冬故郷を離れまして京都に赴き、一橋家に御奉公を致しましたのは、今を去ること五十余年の昔でございます。当時の世の中は只今現公爵の御奉告あられまじく、時勢の変遷朝夕を保たぬと云ふの有様にて、実に危機一髪の際でございました。而して公は幕府の懿親として將軍御補佐の重任にあらせられ、特に禁裏守衛総督の職をお兼ね遊ばして天下の衆目を御一身に集むるの御位置にあらせられ、而も内国の事のみならず、外交最も紛糾の場合にありて、皇室を尊崇して国家を愛護する御苦衷は真に恐察に余りあつたのでございます。農家に成長し且つ青年無学の私ゆへ何等御奉公の効果はございませぬだが、此

賢明の君主に挾りて、目前危殆に瀕して居る国家を救ひたいと思ふの念は其頃よりして肝に銘したのでございます。浪人中は倒行逆施一時に即功を期すると云ふ野心もありましたが、御家に奉職して以来は、順に依り漸を以て事を為すの外決して成功の途は無きものと覚悟しまして何卒一橋の御家をして富強の実を挙げねばならぬと思惟し、思ふて言はざるなく知りて行はざるなく、或は歩兵組立の御用に奔走し、或は財政の整理に尽瘁し、職掌の微賤たるにも拘らず、期念は殆ど一藩の富強を以て自己の責任として勉励したのでございます。世運の転変は私の心に任せませぬで慶応二年の夏公は遂に御宗家御相続と云ふことに相成りました。此時の私の痛心は譬ふるに物なき有様で、実に我が君主をして益々危地に陥る、ものと憂慮しましたが、幾許もなくして私は仏蘭西行の命を蒙つて、憂心中々として海外に赴任したのでございます。果して然り、其年の冬よりして種々なるお国の政変が其都度任地に報告されまして、海外に在る私の心は如何に苦悶したか、其報告に接する毎に幾回か暗涙に咽むたのでございます。殊に了解に苦みましたのは、慶応三年の十月政権を返上遊ばされたと云ふことは公の平生の御主義から或は然らむと恐察しましたが、其後伏見・鳥羽の事変と急遽御帰東の事共は何分実状を曉り得ずして疑を持ちつつ、帰朝を致したのでございます。帰朝後の私の心事は、世態は斯く変化せしも一旦三世の契を結びて、賢明の君主と仰ぎたる上は、一身は唯だ公に奉ずるを以て世を終らむと思ふたのでございます。然るに人事予想の如くならずして、明治二年の冬朝命を蒙りまして大蔵省に職を奉ぜねばならぬ事となつた為めに、前に懐抱したる疑團を解決し得られぬで年月を経過したのでございます。其間世間の公に対する評論是非交々至ると云ふ有様ゆゑに、益々私をして憂愁苦悶の間に置かしたものでございます。どうぞ御心事を充分に研究して事実を世の中に公けにすることもあれかしと希望致しましたが、其時機の到来が意外に遅引したのであります。今を去る凡そ二十三年前に、種々自問自答

の末これは是非御伝記を編纂して、事実を明白にするが私の責任と覚悟致しました。即ち自序にも記載しました如く此御伝記を作るのは私の天より与へられたる使命と感得致しまして、爾米種々なる方面の人々に語りまして、積累の効茲に漸く微意を貫徹することが出来たのでございます。(中略)

最初此事を發起しましたときは、世の中が公を誤解し或は曲解するに至つたのを私は如何にも遺憾と思つて、雪冤的の考慮を持つたのでございますが、それは其時の有様であつて、其後雲霧は消散して天日の公明、今日は社会に明瞭になりましたから、私の雪冤的の念慮は業に既に無用になりましたが、茲に此小著述に依つて後世天下の人の感応を企図するのは、即ち公の大犠牲の精神であります。輒近人文の進歩と共に人々皆智巧に趨りて漸く犠牲的觀念が乏しくなつて、自己本位の弊治々として進むやうに感じます。此時に当りて公の御行動の唯君国のために御一身を犠牲に供されたと云ふことを、能く社会の人に知悉せしめたならば、或は春秋以上の効能あらむと言ひ得るかと思ふのでございます。私は今日御伝記を御墓前に呈するにあたり、此一言を墓前に告げ奉りて、在天の神靈が私の微衷をお饗け下さることを懇願して已まぬのでございます。

①

幕臣の子と生まれた文豪幸田露伴は、洪沢栄一の歿後一周年に因み、青淵翁記念会より伝記執筆を依頼された。

① 洪沢栄一「興山公御墓前に於て」『竜門雜誌』第三五六号、大正七年一月、一一―一三頁。『洪沢栄一伝記資料』第四七巻、六八九―六九一頁。

当初消極的な彼が娘文の勧めもあつて二年後これに着手し、一九三九年に完成して飛鳥山における栄一誕生百年祭に供した。この『洪沢栄一伝』は彼の評伝群においても名品と評されるが、年代的には男爵に叙せられる六一歳までの活動にほぼ止まつている。① しかし、洪沢後半生の壮図として彼は、とくに『徳川慶喜公伝』の編纂を挙げ、これへの讃辞を全巻の結びに置いた。

幸田露伴「洪沢栄一の徳川慶喜公伝」

栄一の旧主徳川慶喜が皇室に対して忠忱ちゆうしんを懐き、国家に対して誠実であつたことは、今日誰も解知せぬものは無いが、それでも時運の不利に遇い、一時は朝敵の名をさえ受けて、謹慎屏居いんきよせざるを得なかつた。この事は栄一が明治政府に登用せられた後、野に下つて自由の身となつてから、事業用で東海道を経る時は、必ず静岡に伺候して、慰藉の誠を致し、また機会を得ては要路の人伊藤博文等にその冤えんを被れることを釈明し、却つて奉公の奉公の大精神を有せられて家を思うよりも国を思い皇を思うの大英断を以て、各種の誘惑を斥け、小乗的の毀譽を意図せず、彼の幕末も危局を、多くの支障無く次の世代に渡された深層を伝え、終に冤雪えんすずがれるを得て、明治三十四年には麁香間祇候となり、その翌年には公爵を授けらるるに及んだ。別にまた栄一は慶喜の伝を編んで、禁裏守衛、將軍襲職、大政奉還等の前後の事情を明らかにして、その本心

① 『洪沢栄一伝記資料』第五七巻、八四一頁。

山田俊治「解説―神話化に抗して」幸田露伴著『洪沢栄一伝』岩波書店、二〇二〇年。三四一―三四四頁。

真相を世に伝えんことを欲し、長き年月を費し、多くの人々の労苦を積んで、一部の大著述を為した。それが今存する『徳川慶喜公伝』である。伝は大正六年に成り、慶喜は同二年に薨じたが、伝成つて後慶喜は永き生命を得た観がある。渋沢栄一は徳川慶喜によって世に出たのであるが、栄一が慶喜に対したのは、実に始あり終あるものであった。①

① 幸田露伴著『渋沢栄一伝』渋沢青淵翁記念会、一九三九年。三六七―三六八頁。幸田露伴著『渋沢栄一伝』岩波書店、二〇二〇年。